

Butterflies Newsletter



No. 83 October 2022 日本蝶類学会

バタフライズニュースレターNo. 83 2022年10月

今年度の大会はオンライン形式で12月10日開催！



▲産卵するゴマシジミ(2022年8月10日 北海道・中標津町)

お盆を過ぎて採集シーズンも終わりに近づくと山梨県の甲府盆地の外れにゴマシジミを探しに行くのが楽しみだった。うだるような炎天下、青くて大きなゴマシジミを追いかけた。大型で見栄えのするこの草原性のシジミチョウを初めて採集したのは小学校5年生の夏のこと。亡くなった蝶の師匠が、山梨県の茅ヶ岳まで連れて行ってくれた。背丈をはるかに超えるような草原の中に潜り込み、ゴマシジミを追いかけるのは小柄な小学生には大変な苦行だった。師匠は良いポイントを探してどこかにサッサと消えてしまい、取り残されてひどく心細い思いをしたのを今でも鮮明に覚えている。かつて甲府盆地周辺に広く多産したゴマシジミも、今ではほとんど姿を消してしまったようだ。

この夏、北海道を家族と旅行した。北海道では道路の法面などにナガバノシロワレモコウが繁茂し、ゴマシジミが分布を拡大していると聞いていたが、実見するのはほぼ初めてだった。確かに何の変哲もないような道端で青くて大きなシジミチョウが舞っているのがあちこちで見られた。産卵シーンを眺めていたら、ふと、「あそこにも飛んでいるぞ」と、あの夏の日師匠の声が聴こえたような気がした。

12月の大会演題を募集します！！

2022 年度「総会・大会」オンライン開催について

2022 年度の会員総会・大会の日程は 12 月 10 日(土)に開催されます。会場の東京大学理学部大講堂がコロナ禍で閉鎖されているため、**2 月の大会と同様、今回もオンラインでの開催**とします。

今年も国内外問わず最新の蝶の話題を提供する予定ですので、皆様ご予定を空けておかれまよう、お願い申し上げます。

★ 2022 年度会員総会・大会

【日時】 2022 年 12 月 10 日(土)※時間未定

※演題の集まり具合を見て開始時間を決定いたします。恐らく午後からの開催になります。

【形式】 会議システム zoom によるオンライン形式

★大会の演題を大募集します！！ 締め切りは11月10日です！

【一般講演・募集要項】

- ・zoom を利用したオンライン形式ですので PC にダウンロードして、あらかじめ環境を整備してください。
- ・講演の申し込みは会員に限ります。ただし共同発表者に非会員が入ることは構いません。
- ・演題は蝶に関するものであれば幅広く受け付けます。講演の演題・内容について簡単なメモ程度で構いませんので以下の事務局までメール送信下さい。
- ・講演の採否は実行委員会に一任ください。
- ・持ち時間は質疑応答含め15分とします。
- ・講演いただく場合には A4 サイズ1枚程度の講演要旨を事前に送付下さい。
- ・講演スライドは Microsoft 社の PowerPoint で作成し、期日までに事前送付下さい。

【申し込み締め切り】 2022年11月10日(木) 17時・厳守

【申し込み先】

日本蝶類学会オンライン大会事務局 宛 E-mail; bsj@shobix.co.jp

問い合わせ TEL 03-3812-5223 / Fax 03-3816-1561(いずれも平日のみ)

★2022年度第1回理事会議事録

【日時】 2022年1月16日 13時半～15時10分

【場所】 進化生物学研究所会議室(東京・世田谷) /zoomによるオンライン

【対面型出席】 菱川法之(会長)、斎藤基樹(理事・運営委員長)

【オンライン出席】 増井暁夫(副会長)、工藤忠、長谷川大、上原二郎、齊藤光太郎、杉原由一、渡辺康之、高崎浩幸(以上、理事)、井上健(監事)

【委任状】 矢後勝也(副会長)、稲岡茂、坂田潤一、Yu-Feng HSU、関康夫、加藤義臣、栗山定(以上、理事)

【報告事項】

◆各委員会からの報告

①運営委員会

2022年度事業計画

②編集委員会

2021年は予定通り3冊(85, 86, 87号)発行・2022年も3冊発行予定

【討議事項】

2021年度の大会・総会について

★2022年度第2回理事会議事録

【日時】 2022年9月22日(木) 16時～17時40分

【場所】 東京大学総合研究博物館本館 3階第一演習室(東京・文京)

/zoomによるオンラインとのハイブリッド

【出席】 *はzoomでオンライン参加

菱川法之(会長)、増井暁夫(副会長)、矢後勝也(副会長)、工藤忠、上原二郎*、杉原由一、渡辺康之*、高崎浩幸*、齊藤光太郎、長谷川大*、斎藤基樹(以上、理事)

【委任状】

稲岡茂、坂田潤一、Yu-Feng HSU、関康夫、加藤義臣、上田俊介、栗山定(以上、理事)

【議事】

・2022年度総会・大会

第二土曜日・12月10日にオンライン形式での開催を決定

2月11日の総会・大会同様に午前中に理事会、午後から総会、大会とする予定

学会賞の検討。

・日本鱗翅学会東京大会の共催団体あいさつ

初日(10/29)に共催団体の紹介あり、矢後副会長が対応 など

2021年度総会・大会(オンライン形式)報告

2022年2月11日に当会では初めてとなるオンライン形式での総会・大会が開催された。当日は事務局要員が東京大学(東京・文京区)に参集し、オンライン会議システムの zoom を活用して運営した。今回の大会では以下の6つの講演が行われた。

【大会講演】

徳島アイノメス愛好会(西田善彦ほか)「恒温器を用いた四国および九州産ゼフィルスの人工産卵」

勝山豊(京都大学蝶類研究会 OB 会 6 大陸クラブ)

「東南アジア蝶標本の画像認識による自動同定の基礎検討」

楠本優作(順天堂大学)「西表島で発生したルリモンジャノメ」

矢後勝也(東京大学総合研究博物館)ほか「オガサワラセセリの自然史と保全」

Yu-Feng HSU(国立台湾師範大学)

“Findings on butterflies of Taiwan during the pandemic Covid-19 period”

「台湾のチョウ最新事情」

◆招待講演 中江 信(横浜市) 「『世界のアゲハチョウ図説』と珍アゲハのエピソード」

中でも招待講演の中江信氏による世界のアゲハチョウに関する講演は図説発行直後のタイムリーかつ、多くの珍稀種を紹介する充実した内容で、オンラインでの参加者は110人を超えて盛況となった。

来る12月の総会・大会も諸事情によりオンラインでの開催となるが、多くの方に参加していただけるように鋭意準備したい。



▲中江氏が講演で紹介した世界の珍稀アゲハチョウ

書評 『世界のアゲハチョウ図説』

岡田朝雄

中江信著 西山保典・Adam COTTON
監修『世界のアゲハチョウ図説』(昆虫文献
六本脚 2021年11月)が完成した。待望の
刊行である。「20年前から準備を重ね、悪戦
苦闘の結果」というだけあって、まことにす
ばらしい出来栄である。

まず図版を見てみよう、

本書の第一の特徴は、世界のアゲハチョウ
全603種の標本写真が、この1冊にすべて
載っていることである。何といても標本の
すばらしさに私は驚嘆した。初めて見る標本
もたくさんあり、その標本すべてがA級品な
のである。これだけ多くの美しい標本のそろ
った図鑑は見たことがない。世界30ヶ国で
採集経験があるという著者執念のコレクション
にして初めて可能なことであろう。

「21世紀において難攻不落で、再発見者は
虫屋の英雄として名を残せる」というオナシ
カラスアゲハ、「2018年に記載された画期的
な新種」ナワテアゲハ雄雌、これまでのほ
とんどの図鑑に載っておらず、ダブルラ図鑑
ではC級品であるザルモクシスオオアゲハの
雌、メキシコの絶滅危惧種エスペランザアゲ

ハ、マダガスカル沖のGrande Comore 島にのみに産する「白い女神」レヴァソールタイマイ、1937年以
後記録がなく、絶滅したと思われるイピタスタイマイなどの大珍品にいたるまですべてA級品なのは驚嘆に
あたいする。

印刷もすばらしい。微妙な色合いがよく出ており、これほど実物に近い図版がそろった図説はこれまでに
なかったような気がする。画像には輪郭を縁取るようにグレーのシャドウが入れているが、これも成功
である。白い縁毛がはっきりと見えて、私は非常に多くの種類に白い縁毛があることをこの図譜でしみじみ
と見ることができた。

パルナシウス属、キシタアゲハ属、トリバネアゲハ属の3属にはすべて雄雌が図示され、ほかの若干の種類
にも雄雌が図示されているものがある。

図版の下には、前翅長、稀少度、棲息環境、棲息標高、分布地域の5項目が見やすく印刷されており、特に
前翅長が34~52mmなどと書かれ、稀少度が★~★★★★★と、星の数で示されていて、図版と見比べ



るのに便利である。

すばらしい出来栄であるが、残念なのは、大部分が縮小されていることである。編集の都合上やむをえなかったのであろうが、あえて欲をいえば、ジョルダンアゲハ、フトオアゲハ、ホメロスアゲハ、オオゴマダライマイなど、有名で、大型の蝶は実物大にして欲しかったと思う。下に全翅長が書かれていても、縮小された図版には迫力がない。キシタアゲハ属も、一部でもいいから原寸大にして欲しかったと思う。また、大型の蝶ではないが、それぞれ微妙に大きさの違う *Parnassius* 属の蝶も原寸大にして欲しかったと思う。

次に解説について見てみよう。

アゲハチョウ全体が 29 属に分けられ、その属の解説が和文と英文で併記され、属の研究史、代表的な研究者とその意見、分布、最新知見、食草・生態、主要文献の解説などが詳しく書かれている。非常によく調査され、行き届いた内容である。

たとえばトリバネアゲハ属ならば、*Aetheoptera*、*Schoenbergia*、*Ornithoptera* の3亜属に分類され、全部で 13 種あること、♂♀で斑紋や翅形が異なること、♂の色彩のこと、♀は地味な色彩で酷似したものが多いため、同定が困難であること。棲息地域、吸蜜植物や活動時間、食草と産卵について。*O. alexandrae* がワシントン条約付属書 I、その他の全種が付属書 II に記載されて、商取引が規制され、保護されているが、原生林の伐採などの開発により、その保護が困難であること。巨大、美しい種で、変異が多いためコレクターに人気があり、高額で取引されたこと。以前、種として記載されていた *O. allottei* や *O. akakeae* は、現在では種間の自然雑交として扱われていること。そして、本属に関する内外の主要な図鑑の紹介などが記されており、この属全体を見渡すことができる。

種類別の解説は、分布の概要、形態的特徴や変異、近似種との区別点、分類学的位置づけ、棲息環境や標高、発生期、食草、擬態関係、種小名に関する情報などが、限られたスペースにうまくまとめられている。

序文に「学術的な堅い文章だけではなく、あえて物語風に著した箇所が幾つもある」とあるが、それは次のような箇所であろう。

アポロウスバ:「日当たりのよいアルプスの草原を力強く飛翔し、アザミ等の草花で吸蜜する可憐な姿にアンリ・ファールやヘルマン・ヘッセも魅了されたに違いない」

ヒデウスバ:「*P. apollo* が記載されてから 230 年、本属の新種を日本人が記録したことは、世界に衝撃を与える画期的なニュースであった。種小名は小岩屋氏の母の名・ヒデから名付けた」

チャールトンウスバ:「2019 年末、アフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲医師は、*Parnassius autocrator* と本種に惹かれ当地を選定したと聞く。農民の自給自足が可能な農村を目指し、資金を貯め、井戸を掘り、誰もが無理と思った 25km に渡る農業用水路を作り、数十万人の命を救った。その英雄の彼が蝶好きであったことに衝撃を受けた」

フトオアゲハ:「北杜夫の短編小説『谿間にて』の中の本種の採集人の話を読み、気持ちが昂ぶって眠れぬ夜を過ごした記憶がある。筆者がアゲハチョウ類の収集研究に走ったのは、この小説に本種が登場したことに起因する」

テングアゲハ:「五十嵐邁らは Tiger Hill にて、高湿度や蛭の大群等の悪条件が続く中、♀を使い遂にモクレン科植物のエキスペーパーへの産卵に成功し *Magnolia campbellii* が食草であることを突き止めた。飼育にも成功し世界初の生態解明が成就され、蛹の形態が *Graphium* 属に近いこと等が報告された。大英博物館の元昆虫部長 Howarth から、先を越された悔しさを全く感じさせない賛美の祝辞が届いたことはよく知られる」

このような文を読むことができるのは、たとえ知っていることであってもすばらしいことであり、本書の解説の大きな魅力のひとつである。

本書の目次はうまく工夫されている。29 属 603 種全種が、属名、亜属名、グループ名、学名(属名、亜属名、種小名、記載者名、記載年)和名の順で示され、属・亜属・種番号が数字と記号で示されている。たとえば、*Parnassius* 属は、*Parnassius*(パルナシウス)亜属、5グループ、15 種類と、*Tadumia*(アッコウスバ)亜属、15 グループ 45 種類、合計 60 種類が記されている。目次を見れば、その種の分類上の位置や近縁種がわかるようになっているのである。

また、アゲハチョウ科のオビクジャクアゲハ種群、アオネアゲハ種群、オオルリアゲハ種群、ナガサキアゲハ種群、アンドロゲウス種群、タスキアゲハ種群、フィロラウスタイマイ種群は、巻頭に分布概念図が示されている。

巻末の内外の豊富な参考文献もこの本のすばらしさを証明しているように思う。もちろん、便利な索引(属、亜属、学名、和名)が付いている。

序文にも書かれているが、アゲハチョウの図鑑では、これまでもパルナシウス属や、トリバネアゲハ属や、国別、地域別のもはたくさんあるが、全世界の 29 属 603 種を 1 巻にまとめたものは、本書が初めてであり、これは画期的なことである。このような図説は、形が大きすぎると扱いにくく読みづらいものであるが、この A4 版はほどよい大きさである。手元に置いて美しい図版を見ながらすみずみまで読んでみたい図譜である。

(追記)世界の蝶についてずば抜けて広く深い知見をもつ大野義昭氏と西山保典氏がこの春相次いで亡くなられた。まことに残念であるが、このお二人がこの図説に多大の協力をされたことは幸いであった。

2022 年 4 月

都道府県における蝶類研究状況に関する一資料

宇野彰

1. 緒言

厳密に世界各地をリサーチした訳ではないが、ざっくりとした印象として、日本は昆虫に関する同好会、研究会などの任意組織が有意に多い国でないかと思う。

ただ、そのことを明文化した報文等は意外と多くないので、本稿では数値化やデータ整理によって各地域の現状を総括しようと試みた。

当初は各組織の活動状況等を点数化して、都道府県別のランキングを作成しようとしたのだが、各地で頑張っておられる皆さんの取組を自分如きが順位化するのはおこがましいと考え直した。ただ、データを整理する中で幾つか興味深い事項が見いだせたので、その概要を以下に記述する。

なお、今回示すデータは、手元にある文献とそのダイジェスト記事、年鑑及びインターネット等を参照して抽出しており、その全てを網羅したものではないことをお断りしておく。ただ、地域の状況把握には多少の役にたつものと思う。

2. データ集積の考え方

(1) 地方活動組織

国内の蝶に関する地方組織(会誌中で、蝶に関する報文等が掲載される可能性のある組織)のうち、2020 年から 2022 年までに会誌の発行実績がある組織をピックアップした(表 1)。

注釈を加えると、期間を区切ったのは、概ね直近 3 年の間の発行が確認されれば活動の継続性が判断できると考えたためである。また、直近ではないが、2015 年から 2019 年の間に発行が確認できた組織につ

いては補足的に※で示した。
また、以下については原則対象範囲外とした。

- ・個人が主催して発行している性質の強い発行物
- ・大学サークルや企業等が母体となった、特定のメンバーによる会誌
- ・博物館等が主体となって発行している館報
- ・ギフチョウなど、特定のグループを対象としている会誌
- ・昆虫の報文の掲載頻度が少ない地方生物誌

要は、本稿で対象としたかったのは、「幅広く蝶を研究対象とする地域の有志が集まって運営を行っている組織の状況」ということである。諸先輩方が、インターネットや SNS もない時代にどうやって同好の士との関係性を築けたのか、今になって思えば不思議だが、逆に言えば苦勞して知り得た有志の集合体だからこそ長続きしたとも言える。さらに、そこに指導者的存在があれば鬼に金棒といったところだ。そう考え、調査対象を任意の有志組織とした。

(2) 都道府県の蝶類の地域出版物

都道府県ごとの蝶に関する出版物等については、成果をアウトプットする難易度を「会誌の発行＜出版物の発行」と仮定し、組織活動が高度化している状況を明確にするために、会誌発行状況と並列して示すこととした。なお、複数の発行実績がある場合は原則、最近の刊行物を一点選抜したが、特筆すべきと筆者が判断した際は複数を併記した(表 1)。

地方の蝶を扱った出版物は多いが、本稿では「採集記録、分布図、種解説、生態写真、各種食草のリストアップなどにより、総括的な手法で地域蝶層の全容を明らかにする」方針が示されているものをピックアップした。

3. 組織活動が盛んな都道府県

都道府県ごとに人口ベースが異なるので、単純に活動組織数があるまま地域の活気を示すことにはならない。ただ、蝶愛好者の平均年齢が上昇し続けている状況を考慮すると、表 1 に示したように、神奈川県 3、愛知県 4、三重県 3 という組織数は特筆すべきである。各組織が設立された経緯はわからないが、プレーヤーが減少傾向の中でも会誌の発行体制が維持できるのは、ある種の偉業であろう。

また、2010 年以降にクオリティの高い蝶関係出版物が発刊されている北海道、福島県、茨城県なども、複数のメンバーによって作成されていると思われることから、蝶に関する組織活動が盛んな地域と言ってもよいのではないかと。ただし、クオリティ云々については筆者の独断である。

4. 組織の活動休止の状況

組織の存在意義は、営利、非営利を問わず、個人の有限性を克服するために必要に応じて構成員を変えることで、目的達成のための活動に継続性を持たせることにある。しかし、その反面、組織の運営の難しさも社会生活を営んでいる者であれば痛感するところであろう。

蝶愛好家の年齢構成、移動手段の高度化、情報伝達の高速度及びパソコン普及による印刷事情の向上等を考慮すると、日本における蝶の組織活動の最後のピークは 1990 年代後半と思われる。それから 20 年以上を経過して高齢化と関係人口の減少が続く現状では、組織が活動休止となっても不思議ではない。残念ではあるが、現象として致し方ないことである。筆者としては、そのような状況においても都道府県の蝶の組織活動率が約 89% (活動が確認できた都道府県 $42 \div 47 \times 100$) であることを評価すべきと思う。表 1 において※で示した組織は、近年になって活動を停止したか、再活動に向けて一時休止中であると言える。中には、世田谷昆虫愛好会のような歴史ある組織が宣言をして活動を終了する場合もあり、理屈で考えれば、今後はそのような事例が増えるだろう。

また、兵庫昆虫同好会のように、組織活動は終了するが会誌の発行は別組織に移管する事例もある。今後の発行元となる NPO の役員には、中峰空氏のような昆虫学のエキスパートも参画しているので、会誌「きべりはむし」はクオリティを保ち続けるであろう。このことは、今後の各地の組織の在り方にも参考になると思われる。

5. 活動のない県の状況と、今後の組織による蝶研究のあり方

近年において、蝶に関する組織活動が確認できなかった県の状況を整理した(表2)。いずれも過去には何らかの活動はあったものの、諸事情により活動休止、または方針転換をしたと推測される。同様のことは、今後も各地で起こり得ることである。

なお、表には示さなかったが、比較的歴史のある組織の活動休止は 2000 年代に入って徐々に目立ってきている。今回のデータ整理で明らかになったのは、釧路昆虫同好会(2013 年休止)、宮城昆虫同好会(同 2004 年)、但馬虫の会(同 2000 年)、姫路昆虫同好会(同 2001 年)、淡路昆虫研究会(同 2002 年)、宇和島昆虫同好会(同 2012 年)、北九州昆虫趣味の会(同 2004 年)等である。後に振り替えると、「あの頃が分岐点だった」ということになるのかもしれない。

ただ、対象を昆虫全体に広げると、蛾や一部の甲虫類などでは若い研究者や愛好者が増えているとも聞く。そのため、これまでは昆虫の中で蝶を興味の対象とする者が地方組織を牽引していた場合もあっただろうが、今後は鱗翅類や甲虫といったグループを問わず、地域の昆虫好きを核とした組織を作り、そこに蝶愛好者も混ぜてもらおう、といった手法が現実的だと思われる。

6. 都道府県の昆虫誌の編纂状況

関連して、都道府県の昆虫全体を対象として総括する昆虫誌(生物誌の中で昆虫を扱っているものを含む)の編纂状況についてまとめた(表 3)。調査対象が桁違いに多くなるため、しっかりと編集チームを編成しないとアウトプットは不可能であり、その点を考慮すると地域出版物よりもさらにハードルが高い。発行者や主催者が行政となる場合も多く、実際の作成時には対外交渉等も多くなり、事務も煩雑になることが想定される。

そのような状況を乗り越えて成果物が完成した場合、地域の昆虫層解明における貢献度は極めて高い。ただ、難易度が増すこともあり、都道府県の昆虫誌の編纂率は約 34%と、蝶の組織活動率よりもかなり低くなっている。

なお、表 1 で示した蝶に関する地域出版物がない府県のうち、千葉県、石川県、福井県、愛知県、宮崎県では昆虫誌が作成されているので、これらの県は蝶の調査研究状況として一定以上の水準を満たしていると言えるだろう。

上記を踏まえ、個人的に将来、昆虫誌を編纂してほしいと考える道都県とその理由を以下に列記する。

- ①北海道…日本の中でも特殊な自然環境のため、編纂が強く望まれる。
- ②山形県…蝶の地方出版物がなく、かつ指導的人物もおり実現性が高い。
- ③東京都…島嶼地域を含めたデータの総括は、今後の研究に極めて有用。
- ④長野県…高山帯の昆虫層の明確化等が望まれる。研究人材も多い。
- ⑤愛媛県…四国では昆虫誌が編纂されていない。一番実現可能性が高い県。
- ⑥長崎県…対馬という特異のファウナを含めた県全体を総括してほしい。

7. 結語

本稿において、日本が蝶を含めた昆虫の地域研究が盛んなことが示された。当会誌 Butterflies に掲載された報文にも、その業績は地方同好会誌の掲載に端を発するケースも多いと思われる。これまで見てきたように、組織活動が今後も続けられるか否かについては不確定要素が多い。だからこそ、これまで各会誌等に発表された膨大なデータを活用して新たな研究がなされ、その成果が Butterflies 誌に投稿されるような流れができてほしいと思う。

なお、本稿について修正点及び補足すべき点があれば、筆者が事務局まで御教示いただければ幸いです。

表 1 2020 年以降に会誌を発行した主な蝶類関係組織及び都道府県における蝶類地域発刊物の出版状況

都道府県	主な同好会誌	発行組織	主な地域発刊物等	著者・編者等	発行年
北海道	Jezoensis	北海道昆虫同好会	完本 北海道蝶類図鑑	永盛拓行 他	2016
	道南虫の会会報	道南虫の会			
青森県	Celastorina	津軽昆虫同好会	青森の蝶たち	津軽昆虫同好会	1986

	青森の蝶※	青森昆虫研究会			
岩手県	岩手蟲乃會會報	岩手虫の会	岩手の蝶	岩手虫の会	1998
秋田県	秋田自然史研究	秋田自然史研究会	秋田の蝶	成田正弘	2000
宮城県	インセクトマップオブ宮城	宮城昆虫地理研究会	宮城県昆虫分布資料*	保谷忠良	1994
山形県	出羽のむし	山形昆虫同好会			
福島県	InsecTOHOKU	福島昆虫ファウナ調査グループ	新・福島県の蝶	渡辺浩	2017
	ふくしまの虫	福島虫の会	福島県蝶類データベース(2020版)	渡辺浩	2020
茨城県	おけら	茨城昆虫同好会	茨城県蝶類誌	塩田正寛	2015
	るりぼし	水戸昆虫研究会			
栃木県	インセクト	とちぎ昆虫愛好会	新・栃木県の蝶	新・栃木県の蝶編集委員会	2000
群馬県	かみつけ	毛野・秩父虫の会	群馬県蝶類誌	大塚依久	1994
	乱舞※	群馬昆虫学会			
埼玉県	寄せ蛾記	埼玉昆虫談話会	埼玉蝶の世界	埼玉昆虫談話会	1984
千葉県	房総の昆虫	千葉県昆虫談話会			
神奈川県	神奈川虫報	神奈川県昆虫談話会	かながわの蝶:バタフライ・ウォッチング	相模の記録を語る会	2000
	相模の記録蝶	相模の記録を語る会	蝶の幼虫探索-神奈川県とその周辺地	相模の記録を語る会	2018
	かまくらちょう	三浦半島昆虫研究会			
東京都	うすばしろ	西多摩昆虫同好会	新版 東京都の蝶	西多摩昆虫同好会	2012
	多摩虫	グループ多摩虫			
	羽化※	世田谷昆虫愛好会			
山梨県	山梨の昆虫	甲州昆虫同好会	山梨の蝶(改訂版)	甲州昆虫同好会	1995
静岡県	駿河の昆虫	静岡昆虫同好会	静岡県の蝶類分布目録	諏訪哲夫	2003
長野県	まつむし	松本むしの会	信州の蝶	栗田貞多男	1996
	New Entomologist※	信州昆虫学会	長野県チョウ類動態図鑑	田下昌史 他	1999
	可良古岫無※	からこるむの会			
新潟県	越佐昆虫同好会会報	越佐昆虫同好会	文献から見た新潟県の蝶類層	荻野誠作	2011
富山県			富山県の蝶(I)(II)*	水野透 他	1998
石川県	翔	百万石蝶談話会			
	とっくりばち	石川むしの会			
福井県					
岐阜県	だんだらちょう	岐阜県昆虫研究会	岐阜県の蝶	西田真也	2005
	啓蟄	岐阜県昆虫分布研究会			
愛知県	佳香蝶	名古屋昆虫同好会			
	三河の昆虫	三河昆虫研究会			
	三河生物	西三河野生生物研究会			
	蟲譜	三河生物同好会			

三重県	ひらくら	三重昆虫談話会	三重県産蝶類分布表 1957-2016	河本実	2017
	めもてふ	三重蝶友会			
	しゃくとりむし	三重だんごむしの会			
滋賀県	Came 虫	AWF 滋賀むしの会	滋賀県のチョウの分布	滋賀県チョウ類分布研究会	2011
奈良県					
和歌山県	KINOKUNI	和歌山昆虫研究会			
京都府	Insect 丹後・丹波	丹後・丹波虫の会			
大阪府	大昆 Crude	大阪昆虫同好会	増補改訂版 大阪府の蝶	大阪昆虫同好会	2013
	南大阪の昆虫	南大阪昆虫同好会			
兵庫県	きべりはむし	NPO 法人こどもとむしの会	兵庫県の蝶	広畑政巳 他	2007
岡山県	みちしるべ	岡山昆虫談話会	岡山の蝶	難波通孝	1996
	すずむし	倉敷昆虫同好会	岡山県蝶類データ集	三宅誠治	2003
広島県	広島虫の会会報	広島虫の会	広島県の蝶 過去と現状	中村慎吾	2001
			広島県蝶類図鑑	神垣建司	2001
鳥取県	ゆらぎあ	鳥取昆虫研究会	日本の蝶:鳥取県の蝶	松岡嘉之	2014
島根県	すかしば	山陰むしの会	山陰のチョウたち	山陰虫の会	1994
山口県	山口のむし	山口むしの会	山口県の蝶	山口むしの会	2021
香川県	へりぐる	瀬戸内虫の会			
愛媛県	いよにす	愛蝶会	愛媛の蝶	愛蝶会	2021
	誤苦楽蝶※	世界の蝶保存会			
徳島県					
高知県	げんせい	高知昆虫研究会			
福岡県	博多虫	博多昆虫同好会	福岡県の蝶	博多昆虫同好会	2019
	KORASANA	久留米昆虫同好会			
佐賀県	佐賀の昆虫	佐賀昆虫同好会	佐賀の蝶	西村謙一	1993
長崎県	こがねむし	長崎昆虫研究会			
大分県	二豊の虫	大分昆虫同好会			
熊本県					
宮崎県	タテハモドキ	宮崎昆虫同好会			
	INSECTA MIYAZAKI	宮崎昆虫調査研究会			
鹿児島県	SATSUMA	鹿児島昆虫同好会	鹿児島のチョウ	福田晴夫	1992
沖縄県	琉球の昆虫	沖縄昆虫同好会	琉球列島の蝶	大屋厚夫	2018
			改訂・沖縄県の蝶-記録された蝶と食草-	比嘉正一 他	2019

注1 ※は2015~2019年に発行を確認した会誌

注2 *は複数年の発行であることを示す(表記年は最初の発行がなされた時点)

県名	状況等
福井県	福井昆虫研究会が 2008 年まで会誌「福井昆報」を発行。同会は解散。 その後、福井昆虫同好会が 2008-2010 年に「福井昆虫同好会報」を発行。 同会は以後、活動休止の状態。
富山県	富山昆虫同好会が 1999 年まで会誌「Amica」を発行。 同会は以後、連絡誌「Amica 通信」の発行を継続。 2014 年までの連絡誌発行を確認したが、その後の状況は不明。
奈良県	ならむしの会が 1995 年まで会誌「ならがしわ」を発行。同会は以後、活動休止。
徳島県	徳島昆虫研究会が 2010 年まで会誌「徳島昆虫」を発行。 同会は以後、甲虫類を主な研究調査として活動。会誌発行はなし。
熊本県	熊本昆虫同好会が 2011 年まで会誌「熊本昆虫同好会報」を発行。同会は以後、活動休止。

表 3. 各県の昆虫誌編纂状況

県名	昆虫目録等	発行者・作成者等	発行年	備考
岩手県	岩手県野生生物目録	岩手県自然保護課	2001	ネット閲覧可能
栃木県	とちぎの昆虫	栃木県自然環境調査研究会	2003	
埼玉県	埼玉県昆虫誌	埼玉昆虫談話会	1997	
千葉県	千葉県動物誌	千葉県生物学会	1999	
神奈川県	神奈川県昆虫誌	神奈川県昆虫談話会	2018	第 2 版
石川県	石川県の昆虫	石川虫の会・百万石蝶談話会	1998	
福井県	福井県昆虫目録	福井県自然保護課	1998	第 2 版
岐阜県	岐阜県昆虫目録	岐阜県昆虫分布研究会	2013	複数年発刊
愛知県	愛知県の昆虫	愛知県自然保護課	1990	複数年発刊
三重県	みえ生物誌	三重自然史の会	2018	
滋賀県	滋賀県昆虫目録	滋賀県自然環境保護課	2017	ネットのみ
広島県	広島県昆虫誌	比婆科学教育振興会	2014	
山口県	山口県の昆虫目録	山口むしの会	2018	
佐賀県	佐賀県の生物	佐賀県の生物編集委員会	1996	
宮崎県	宮崎県昆虫目録	岩崎郁雄編	2020	
沖縄県	琉球列島産昆虫目録	沖縄生物学会	2002	

取手市の不思議なウラゴマ話

柳下 昭

私の目の前をビューと蝶が通り過ぎた。この時、白・黒・やや青っぽい蝶であることは目の端に捉えており種名までは判別出来なかった。その時思ったことは一言「何?」。次の年の同じ時期にも見られるかと思って、今回は小さなお散歩用のネットを持って行った。そこは木が林立し、やや薄暗いところで、利根川の河川敷の中の一画である。標高は20 mも無い。釣りをする人が、草ボウボウの道を分け入って釣り糸を垂れている。狙いは鯉や鮒だろう。

薄暗い空間の中、時々、ビューと蝶が飛んで行く。大変早く飛ぶのであるが、柄が30cmしかないネットのためか手が届く範囲を通る蝶を狙いすませて振るのが精一杯で、何度も何度も失敗の連続。やっとネットに入れた蝶はウラゴマだった。その時の私の第一声は「ウツソー」、何故なら茨城県に長く住む蝶同好会の人からは、ド平地の取手にウラゴマは居ないと言われていたからだ。

通常、ウラゴマはやや山地性で、山に近い平地でも居るが、山が連なっているところに存在する。私が今まで経験した採集ではヒラヒラと飛び、採集は比較的楽なはず。ところが取手の河川敷のウラゴマは私の常識をひっくり返した。取手のウラゴマはイボタの花に対しやや発生が遅いようであり、発生期間は非常に短いようである。経験から取手のウラゴマは日の光の下に長時間出ないようで、それも薄暗い木陰の中を猛スピードで飛ぶ。従って直ぐ翅はボロボロになる。この発生場所は河川敷の中なので、大凡1年に1回1週間程は2~3 m水没するのである。利根川の上流や鬼怒川付近で大雨が降ると下流域の利根川の水が多くなり、堤防の中の河川敷は完全に長時間水に浸る。そうであれば食樹下方に産み付けられた卵は死滅するだろうが、次の年も従来通り元気に成虫はビュンビュンと飛び交うのである。従って遺伝子的に大きなイボタの頂芽付近に生んだ卵でしか生きられない運命の個体群、即ち取手のウラゴマは選別に選別された遺伝子の個体群と考えられる。一度洪水の無い冬に採卵を試みた事があるが、イボタの根本や手が届くところの範囲に卵は付いていないことを確認した。

取手のウラゴマは微視的に生態や形態が異なる個体群の1つであると考えられる。元はきっと渡良瀬遊水地から流れ着いたのだろうが、今はもう生態条件が異なっているように思う。取手のウラゴマはド平地でありながら表面的な色合いは山地型。雌は通常より大きいサイズとなり、飛び方はデカいためかヒラヒラと飛ぶ傾向にある。だが樹上を飛ぶので取り逃がしやすい。採るならルッキングがお薦めだがなかなか難しい。

私が友人に取手のウラゴマのことを教えてから毎年採集に行っているよう。そこで得られたウラゴマの雌、同好会でオークションに出したらしいが、取り合いになり事務局長特権を行使して皆に文句を言わず事務局長が持って行ったそうです。

今日も取手のウラゴマ、ビュンビュンと飛んでいます。

軟化展翅のテクニック

柳下 昭

軟化展翅の場合、筋肉を破壊した跡に糊を付けます。だが展翅板の溝の幅が狭いとその糊が展翅板の溝に付き、胴体や翅が展翅板に接着されてしまい、乾燥後標本を抜く際に酷いことになります。薄いナイフなどを使って剥がすのは大変な労力が必要でその防止方法を紹介します。

写真を見て下さい。私が使っている接着防止のシートです。そのシートは小さくて鋏でカットして使っていて、展翅のする際に翅の下に”く”の字型に折り曲げて入れて展翅します。シートは薄いので翅の変形は判りません。標本を展翅板から抜いた際に、標本側に付いて来ますが離型性が良いのでピンセットで一センチ引くとパラッと剥がれます。

どうしても幅が狭い展翅板を使わなくてはならない時など有効です。また接着剤を多く付け過ぎ、翅の一部まで付けてしまった場合などに有効です。シートの表面は離型性が有るので、水で薄めた接着剤は表面張力で小さくなりますし、シートの厚みである程度ならシート外にはみ出しません。

私が使っている材料はある決まった廃材を使っているのだから判りませんが、本など新潮社から郵便で送ってくる際に表面をカバーして来る材料です。ポリプロピレンかな？

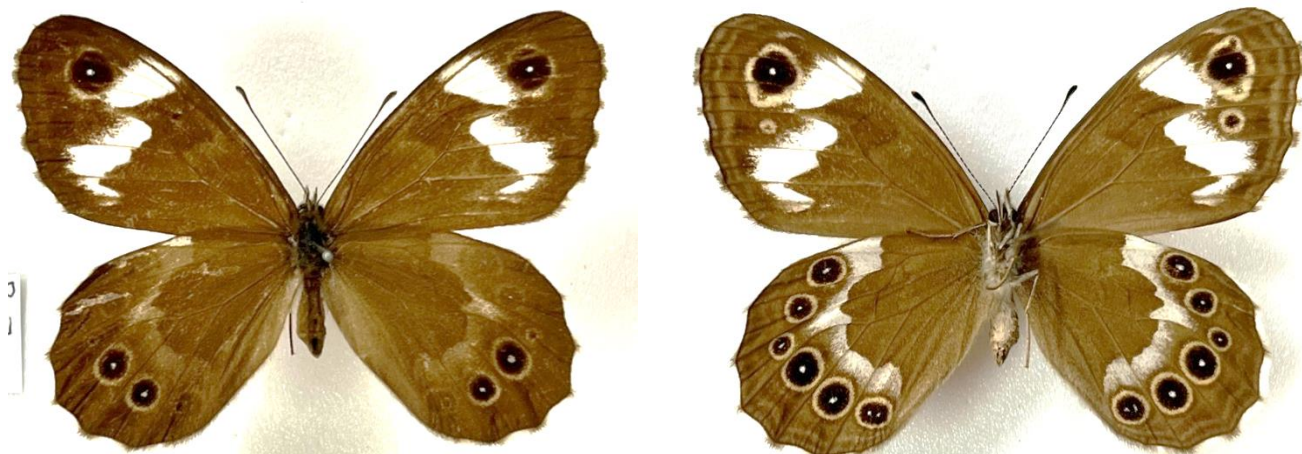
困った際には試してみてください。



▲胴体に付着しているのが接着防止のシート

進化研コレクションの逸品紹介①

最美のツマジロウラジャノメ



【データ】長野県南安曇郡安曇村 1977年8月11日 田中彰 採集
進化生物学研究所・所蔵

1ページ、埋めないといけない事情が生じたため、急遽画像のストックを漁っていて見つけた1枚。ツマジロウラジャノメは北海道、本州、四国に局地的に生息する優美なジャノメチョウである。食草の関係で山地の岩場や崩落地に見られるが、どこでも概して個体数は多くない。雌雄の斑紋は明瞭に異なり、特にメスの翅を彩る特徴的な純白色(北海道の名義タイプ亜種 *deidamia* はクリーム色)の帯は特に目を引き、飛翔中でもハッキリと雌雄の区別がつくほどである。

そんなメスの白帯が極めてよく発達した極致のような個体が進化生物学研究所に所蔵されている。長野県安曇村で1977年8月に採集されたこのメスは前翅の白帯が肥大し、「白帯」というよりはもはや「白紋」と化している。おまけに裏面では前翅頂の眼状紋も発達して、過剰紋すら生じている。本種を多く所蔵しているコレクターはそれほど多くないと思うが、果たしてこれほどの美形はお持ちであろうか。

近年、食草の自生する崖への吹付工事や気候変動に伴うとみられる乾燥化などで本種の個体数も減ってきているようだ。殊に別亜種 *kampuzana* とされることもある南限産地の四国においては危機的な状況にある。かつては愛媛県、高知県、徳島県の標高1,000 m以上の山地に点々と分布が知られていたものの、徳島県ではおそらく絶滅、愛媛県と高知県の県境付近の瓶ヶ森周辺(右上画像)などにわずかな棲息地が知られるだけになっている。

最後になるが、コレクションに閲覧・撮影にご協力いただいた進化生物学研究所の青木俊明主任研究員、山口就平主任研究員に厚く御礼申し上げたい。



運営委員会からのお知らせ！

◆ 今年度の会費をお納めください！

当会の会計年度は1月から12月までです。2022年度の会費をまだ納入されていない皆様は、お忘れ無きようにお願いします。事務局業務を外部委託しましたので、これまでよりも迅速に宛名ラベルの会費納入状況の更新が可能になっております。これまで「入金したのに宛名ラベルに反映されていない」事態がたびたび発生して会員の皆様にご迷惑をお掛けしていましたが、この点は改善されました。

◆ 公式ウェブサイト、ブログやTwitterでも情報発信中です！

当会の情報は公式ウェブサイト(「日本蝶類学会」で検索)、ブログ(「BSJ Blog」)、Twitter (bsj.t アンダーバーです)など複数のメディアで公開しております。ぜひ一度覗いてみてください。ブログは2012年に開設して以来、累計アクセスが70万を超えました。Twitterのフォロワーも順調に増加して、とうとう3,000人を超えました。これからさらに積極的な情報発信に力を入れたいと思っております。WEB関係に詳しい会員の皆様のご協力もお願いします。今回はInstagramに進出しようかどうか悩み中です。

◆ 会員の勧誘にご協力を！

日本の蝶界の高齢化に伴い、当会の会員数も減少傾向に歯止めがかかりません。幸いなことに新規会員の参加もあって、大幅減にはなってはおりませんが、今後の見通しはまったく明るくありません。今後少しでも当会の活動が安定して続くためには会員増が欠かせません。ご友人などでまだ会員になっていない方が身近におられましたら、ぜひ勧誘していただきたいと思っております。新規会員には会誌のバックナンバーも入会特典として差し上げております。また、ニュースレターなどは会員勧誘用に残部もありますので、お気軽に下記の事務局までご請求下さい。どうぞよろしく願い申し上げます。

◆ 情報提供お待ちしております！

こんな蝶を見つけた、でも、最近こんな蝶が減ったでも構いません。身近な話題をどしどしお寄せ下さい。ニュースレターにも掲載していきたいと思っております。送り先は下記まで！

<編集後記>

今号に収録した宇野彰氏の「都道府県における蝶類研究状況に関する一資料」は労作で、ニュースレターにはもったいないという気もする。日本の蝶研究は在野のアマチュアが主体で進められてきたのは周知の事実であるが、高齢化と愛好者の減少によって退潮傾向にあるのは否めない。最大のボリュームゾーンである団塊の世代もすでに古希をとうに過ぎ、各個人が所蔵する膨大な標本や文献をどう引き継いでいくのかはまさに喫緊の課題である。当会としても次世代の育成に真剣に取り組まなければならないところではあるが、数少ない蝶好きの若い世代にとって「必要とされる」組織のあり方とは果たしてどのようなものなのか。なかなか解が見いだせないでいる。(M)

Butterflies Newsletter No.83 (2022 October 20)

発行:日本蝶類学会 〒113-0001 東京都文京区白山1-13-7 アクア白山ビル5F

勝美印刷(株)内「日本蝶類学会」事務局 TEL 03-3812-5223 / Fax 03-3816-1561

E-mail; bsj@shobix.co.jp 郵便振替口座 00170-1-334608 日本蝶類学会